

No.109

新設図書館の紹介  
笠岡市立子ども図書館



「ゆったりとしたスペースの絵本コーナー」

平成二十一年四月二十三日、笠岡市立図書館に「子ども図書館」がオープンしました。この施設は、宝くじ協会の助成を受け、旧勤労青少年ホームを改修し、隣接する図書館の本館部分との間に連絡通路を設けて、図書館の付属施設として整備されたものです。

「子ども図書館」が開館するまでは、児童閲覧室は本館の二階にありました。エレベーターが設置されていないため、小さい子どもを連れた方や、ベビーカーを押して来られた

利用者にとってはとても不便な図書館でした。そういうこともあって、「子ども図書館」は一階に設置しました。授乳やおむつ交換ができる授乳室も整備したので、赤ちゃんを連れた方も安心して来館できるようになりました。開館後は、「赤ちゃんの駅」の協力施設にもなりました。



「洗面所もあり便利な授乳室」

「子ども図書館」は以前の児童閲覧室に比べ、面積が約一・五倍になりました。そのため、絵本コーナーをゆったりとしたスペースにすることができました。私たち司書にとって念願だったたくさんの絵本の表紙を見せて置くことができるようになりました。色んなコーナーを作ったり、司書のお薦めの本を置いたりし

て、子どもたちに手に取ってもらいやすいように工夫しながら配架をしています。このコーナーは靴を脱いで利用するため、子どもたちは自分の好きな場所で絵本を広げて楽しんでいます。絵本コーナーに隣接して、読み聞かせのコーナーの「おはなしのへや」も設置したので、図書館行事を行ったり、見学に来た子どもたちの場としても活用しています。



「行事などで大活躍なおはなしのへや」

笠岡市では、平成二十年四月からブックスタートが本格的に始まりました。二十一年四月には、「笠岡市子ども読書活動推進計画」が策定されました。幼稚園や保育所(園)では読み聞かせが活発に行われていきます。小中学校には学校図書館司書が配置され、子どもたちに本の楽しさを伝えていきます。子どもの読書環境が少しずつですが整いつつあることを感じます。その中心である市立図書館の資料と人の更なる充実を目指していききたいと思っています。

十月二十七日には、改修工事のため休館していた本館部分が開館しました。本館は大人のスペース、「子ども図書館」は子どものスペースとして新たに図書館サービスを開始しました。今までの図書館は、大人と子どものスペースが同じ場所にあったため、閲覧する人にとっては騒々しく感じ、子どものスペースを利用する人にとっては子どもの泣き声などで周りに気兼ねをするような状況でした。今ではそういったこともなくなり、あちらこちらで親子が絵本や紙芝居を楽しんでいます。そのような光景を目にするだけで嬉しく思い、また励みにもなります。

「子ども図書館」ができてからは、子どもを近くに感じるようになっていきました。今後は今まで以上に児童サービスに力を入れていけるものと思います。施設が新しくなり、本がイキイキして見える図書館になりました。たくさんの人に親しんでもらえる図書館を目指して、日々の業務を行っていききたいです。



「絵本のコーナー」

## ☆個人会員の紹介☆

「個人会員の紹介」にかえて

金光図書館 金光 英子

毎年夏休みの終わりごろにかけこんできて、すぐ読書感想文の書ける本や一日で自由研究ができる本を要求する子供たちがいる。夏休みこそ時間をかけて取り組んでほしいと思うのにかかわらずである。しかし、子どもたちの要求は解るし、きつかけがないとなかなかむずかしい。

そのきっかけをと金光図書館では、「夏休みの宿題おまかせ企画―調べ学習、自由研究をしよう―」を計画した。自分で身近なテーマを見つけ、図書館の資料を使って調べる喜びを味わってもらうことを願って、二つの行事を開催することにした。幸い金光図書館のすぐ近くに町のシンボリックな木綿崎山があり、門前町がある。そこで一つは自然観察を願って「木綿崎山歩き」を、今一つは郷土や歴史に興味をもつことを願って「門前町歩き」を企画して呼びかけた。はたして何人集まるかが心配だったが、どちらの企画にも保護者を加えて、三十名以上が集まりおおむね好評だった。中には、日程があわないのでほかの日に開催してほしいとか、次回はいっ、どういう企画をするの

かなどさまざま要望があり、うれしい悲鳴をあげるほどだった。

「木綿崎山歩き」を開催したのは六月十七日であった。森林インストラクターの松下道恵氏にお願いして、木綿崎山を自然観察しながら歩いた。近隣のものにとっては、身近な散歩コースで毎日歩いていても、インストラクターの説明で、目からうろこが落ちる、わくわくどきどきの時間となった。木のそばを歩いても目にとまらなかつた「どんぐりのあかちゃん」や、木の根っこから「芽をだした新しい葉っぱ」てんぐのうちわのようなやつでの葉が、大きくなる前は、じゃんけんのグーみたいだったり、草むらにひっそりとか「かわいいきのこ」がはえていたり。

図書館に帰り着いたとき、子どもたちは、もうすっかり木綿崎山の植物博士になっていた。



「商店街の店主の話にみんな興味津々」

「門前町歩き」は六月二十五日に開催。門前町を実際に歩き、道の造られた過程や商店街の成立に子供たちは目を輝かせた。さらに一軒一軒の店をのぞくと店主たちが、店の成り立ちや特徴について熱く語ってくださった。ふだん何げなく通っている道やお店やそこに働く人々が、ぐっと身近になったようだった。

両企画とも歩いた翌日、図書館にやってきた子供たちは、職員といっしょに自分のテーマさがしに取り組んだ。この企画にあわせて閲覧室の一角に図書館の学校主催の図書館を使った調べる学習賞コンクールの優秀作品を借りて展示しておいた。これらの作品はいつでも自由に見ることができたので参考になってよかったようだ。さらに、金光図書館には、五十年前の小学五年生の自由研究が保存されていたので、それも併せて展示しておいた。

このようにして、テーマを見つけたり子供たちは、さつそく自由研究に取り組んだ。

夏休みが終わって自由研究の成果が、図書館に届けられた。植物に関する作品二点と門前町一点である。三作品とも地域にねざした特徴ある作品だった。なかでも、「門前町の研究」を書いた小学六年生の作品は、五十年前に当時の小学五年生が作っ

た年表をそのまま生かし、その後の五十年と地図を加えたものである。

実は、五十年前の小学生とは従兄妹であり、今の小学六年生とは従兄妹の



「図書館にて、自由研究のテーマを探しているところ」

孫にあたる。年表は、金光町と日本と世界のできごとが、比較できる三段形式で、卑弥呼で始まり昭和三十四年の、ソ連の宇宙ロケット打ち上げ、皇太子ご成婚、金光に祭場完成で終わっていた。その年表にその後の五十年を加え、門前町が形造られる変遷を地図にしたものが、今回の作品となった。作者の宝物であると同時に、金光図書館の宝物にもなったと思う。これらは図書館の学校主催の図書館を使った調べる学習コンクールに送られた。

今度は、日本野鳥の会の方から、「金光の野鳥たち」の資料が届いた。

木綿崎山を中心に一年間の観察の成果が記録され資料化されたものである。さて、金光図書館としてどうしたらよいか。どんな展開が待っているか。今後が楽しみである。来年も五十年後も…。



「自由研究を持っている  
金光卓人さんと金光英子さん」

図書館のディスプレイ④  
（奈義町立図書館）

今回事務局から執筆のお話をいただき、いざ引き受けたまではよかったのですが、改めて振り返ってみると、紙面で紹介できるほどの目新しい展示がなかなかないことに気づいて、慌てました。

小規模館で元々の蔵書数が限られますので、展示したときにある程度のボリュームを確保できるよう、毎回テーマ選びには頭を悩ませています。

そんな中でも、できるだけ当館らしいテーマを選んで紹介したいと思っています。



◎「食育」コーナー

平成十九〜二十年度にかけて、岡山県が実施する「食育から広げる生活リズム向上プラン」事業のモデル地域に奈義町が指定されたのをきっかけに、町教育委員会の担当課（教育総務課）などとの連携事業の一環として実施しました。

ひとくちに「食育」といっても幅広い分野に及びますので、分類374健康教育、375学習指導、383飲食史、498食品学・栄養学、596食品・料理、610農業などを中心に、食生活や食品衛生、食文化、食習慣、郷土料理、農業教育、地産地消、関係法令などに

関する資料をチョイスしています。冊数としては三百数十点とそれほど多くありませんので、来館者の興味を引きやすいように、フロアに上

がってすぐのところとくに配置し、期間中はコーナーの資料を使って答えをさがすクイズ、食事バランスガイドなどのパネル展示や自由に持ち帰れるパンフレット・リーフレットの設置など、周辺の情報とあわせて展示に迫力を持たせるようにしました。

また、資料及び調べ方を案内したパスファインダーのチラシを広報紙に挟み込んで配布したところ、それを頼りに来館して資料を利用する方も多く、好評でした。

パスファインダーの町内配布については、全戸に配っても二千三百世帯程度ですので、経費もあまりかからず実施でき、ふだん図書館を利用しない方への広報にもなります。小さな自治体ならではの強みかと思えます。

コーナーについては、当初モデル事業が終了する平成二十一年三月までの予定でしたが、期間をつうじて貸出の回転率も高かったため、その後半年近く展示を続けました。

現在は、他の展示を行うため撤去していますが、新しい資料が増えてきたら、切り口を変えてもう一度やってみたいと考えています。

◎パスファインダーで紹介した資料の展示  
機関紙の増刊号という体裁で不定期にパスファインダーを発行してお

り、それとあわせて関連資料を展示しています。

これまで、身近な法律や花粉症・アレルギー性鼻炎、インフルエンザとウイルス感染症などのテーマを取りあげて実施しています。

食育コーナーと同様、企画展示の周知をかねて、パスファインダーを広報紙に挟み込んで町内各戸に配布したり、同様の内容を庁内グループウェアで職員向けに配信したりしています。

余談ですが、職員向けメールに限って言えば、パスファインダーと関連資料の特集・展示の紹介文を配信した直後は、どちらかといえれば展示のテーマに関わる問い合わせもあり、それ以外のレファレンスや貸出予約が増える傾向にあります。試しに何人かの職員に感触をたずねてみたところ、「図書館からメールが届くと、仕事やプライベートのちよつとした調べ物や資料予約を頼んでみようか、という気になる。」との答えが返ってきました。少なくとも役場職員に対する図書館活動の広報にはつながっているようです。

また、一連の準備をつうじて、自館にどんな資料があって、足りない資料はなにか、蔵書構成を見直すよい機会になっています。



◎奈義町現代美術館作家コーナー

当館は、平成六年に奈義町現代美術館との複合施設としてオープンしました。その関係で、当館及び美術館を設計した建築家磯崎新氏ならびに美術館の常設展示を担当した現代美術作家三氏（荒川修作・宮脇愛子・ンギンズ）・岡崎和郎・宮脇愛子）の著作及び関連資料約三百点を収集、展示しています。

収集範囲は和書及び洋書を中心ですが、一部和洋雑誌、視聴覚資料などが含まれます。

また写真集「磯崎新・宮脇愛子ポランド・スペイン・フランスに於けるアルバム」（安西重男写真・制作）のように、一般に流通していない資料や絶版本が多数ありますので、美術館の来館者や建築・現代美術に興味のある方から、資料に関する問い合わせを受けることもあります。

今回原稿を書きながら、図書館のディスプレイは、地中に埋もれた財宝を掘り当てる作業に似ていると思いました。通常の本棚に配架しているときは他の資料の間に埋もれて利用されなかつたものが、提供の仕方を変えたり、関連資料とあわせて展示することで利用されだすことがよくあります。

工夫次第で経費をかけずにできるものもありがたいですね。

これからも他館の取り組みを参考にさせていただきながら、折りにふれて新たなディスプレイに挑戦したいと思っています。

## 「学校図書館と公共図書館との連携」について

矢掛町立図書館

司書が矢掛町内の小・中学校の学校図書館へ関わるようになって四年目を迎えました。

学校へ勤務するに当たり、私たちはまず、学校図書館司書としての共通認識を図るために勉強会を開きました。

当初、公共図書館と両方の勤務とすることで職員は不安の毎日でした

が、次第に子どもたちの笑顔に接したり、楽しく会話をしたり、先生方とのコミュニケーションがとれたりなど、学校との連携ができてくると、それぞれの学校図書館の運営に参加できる喜びを感じる事ができるようになりました。

学校数が多いので現在、一人が一校または二校受け持ち、毎週一回勤務しています。しかし、週一回なので、仕事の優先順位は決まってきました。図書館担当の先生と連携をとりながら進めています。先生との打ち合わせの時間の確保がむずかしいので、連絡ノートを作成し、毎回の仕事の進み具合や尋ねたいことなどを記入し、次の週がスムーズに進められるように連携を図っています。どの学校でも図書登録は必須です。ブックコートもしているのだから時間がかかりますが、本が傷まずに保存できるという点から労力はありますが、大切に扱ってくれると期待してやっています。

司書は、学校の準備を前日までに済ませ、ブックル（図書館車）に児童本を載せて貸出し用のパソコンを持って出かけます。子供たちはブックルが来るのを楽しみにしています。

「お願いします」担任の先生に連れられ元気よく挨拶して図書室に入って来る子供たち。手には先週借



「今日はどの本を借りようか みんな悩み中です」

りたブックルの本を持っています。返却の後、今日借りる本を選びます。子供たちや先生方が借りたい本がないときには予約をします。図書館になければ県の横断検索システムを使い、県内の図書館から取り寄せてリクエストに応えます。ブックルの本は、公共図書館の貸出しシステムに反映されているので、休日に親子で利用に来たときには、「学校でも借りているのね。」「ブックルの本だよ」という親子の会話が聞こえて来ることがあります。

今年に入り、学校の読書推進の機運が以前より高まり、どの学校もブックルの貸出しが伸び、学校によっては100%のところも出るほどで、司書も嬉しい悲鳴を上げています。

図書委員さんとの連携も仕事を進める上では大切なことです。

公共の図書館と連携して「どんどん読書」の取り組み（カウンター前に学校指定の本を別置しておく）や学期ごとの読書週間の内容について担当の先生と相談をしています。ブックトークなどの準備もしています。……

学校の貸出構成は他館より借受本の占める割合が比較的大きい。我が校の貸出構成は他館より借受本の占める割合が比較的大きい。（図1参照）

司書の口誌から

学校全体で読書活動に取り組んでいます。毎週必ず図書委員さんが、ブックルの本の運搬から貸出し・返却まで手伝ってくれます。校内放送でブックルのアピールをします。毎回の貸出率は九割近くを保っており、本の返却を忘れる子どもほとんどいません。壁面の飾りなども協力して季節にあつたものを作っています。休憩時間には毎回絵本の読み聞かせもしています。



「貸出し・返却のお手伝いをする頼もしい図書委員さん」

学校図書館に関わるようになり仕事は忙しくなりましたが、学校の子どもたちが私たちが行くのを楽しみにし、先生方からも図書についての相談を受けたり、「学校図書館が生き生きしています」という声を聞くにつれ、司書という仕事のやりがいを感じています。司書は毎回自分の一日を日誌に書きとめ、次の時に生かすようにしています。問題点は、司書同士が意見を出し合って解決したり、学校へ連絡したりして解決しています。学校からもたくさん要望が届き、準備に時間を費やすことも多々ありますが、地域のために頑張っています。まだまだベテランという力はありませんが、本を媒介として地域の公共図書館・学校図書館の両面に勤務できることの幸せを感じています。

学校図書館に関わるようになり仕事は忙しくなりましたが、学校の子どもたちが私たちが行くのを楽しみにし、先生方からも図書についての相談を受けたり、「学校図書館が生き生きしています」という声を聞くにつれ、司書という仕事のやりがいを感じています。司書は毎回自分の一日を日誌に書きとめ、次の時に生かすようにしています。問題点は、司書同士が意見を出し合って解決したり、学校へ連絡したりして解決しています。学校からもたくさん要望が届き、準備に時間を費やすことも多々ありますが、地域のために頑張っています。まだまだベテランという力はありませんが、本を媒介として地域の公共図書館・学校図書館の両面に勤務できることの幸せを感じています。



「絵本の読み聞かせにみんなの瞳は輝いています」

我が校の貸出構成は他館より借受本の占める割合が比較的大きい。我が校の貸出構成は他館より借受本の占める割合が比較的大きい。（図1参照）

我が校の貸出構成は他館より借受本の占める割合が比較的大きい。我が校の貸出構成は他館より借受本の占める割合が比較的大きい。（図1参照）

「学校図書館と公共図書館との連携」について

和気町立佐伯中学校嘱託司書 吉房 ゆかり



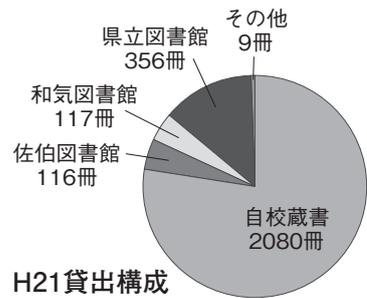
「お気に入りの本に出会う瞬間」

水	水	金	金	土
県立図書館				
↓↑	(県からの直通)			↓↑
和気町立和気図書館				
↓↑	↓↑	(町内搬送便)		
和気町立佐伯図書館				
↓↑	↓↑	(直接受取)		
佐伯中学校				

図2

年 度	H20	H21
生 徒 数	99	90
貸出冊数	4237	2678
一人平均貸出冊数	42.80	29.76
借受冊数	953	598

※ H20 は一年間のデータだが、H21 は4月から9月までの約半年間のデータを使用している。



H21貸出構成

図1

図2は県から借り受ける場合の本の搬送経路を示している。

借受に力を入れることができたのは、次の理由からである。

- 一、佐伯図書館が近くにある。
- 二、勤務時間内に佐伯図書館に借受本を取りに行くことができる。
- 三、本校が専任である。
- 四、地元到店頭販売の書店がない。
- 五、佐伯図書館の協力が得られた。

これら五項目のうち、三、四、五番について、更に詳述しよう。

特に重要なのは三番である。専任でなければ、一ヶ月間団体貸出の地元図書館の本はともかく、県の本の日常の利用は困難だと思われる。(返却のタイミングによっては、佐伯図書館に返却してから県に返送されるまで八日間かかることもある)管理・貸出手続き・期間内の返却の難しさ等々、兼務校では厳しいだろう。

次に、マイナス条件であるはずの四番をここに挙げて理由を述べよう。生徒からリクエストがあった時、それが購入基準に即した本であっても即時購入は難しい。注文から二か月以上経つてからの納品も多く、注文した品の五分の一は数ヵ月後に『品切。重版未定。取寄不可』の通知が届く。出版不況の昨今仕方ないことなのだろうが、本校は地元書店以外からは購入できないシステ

ムであるがゆえ、「あそこの本屋には売ったよ?なんで買えんの」と生徒の言葉が痛い。そしてその際、「公共図書館からのお取り寄せ」制度は保険として機能しているのだ。

最後に五番は、「連携」の大切さを示している。中学校長利用者カードを用いたネットからの県への直接申し込み(十冊まで)と、佐伯図書館から県に依頼してもらうという二つのルートでこれだけの冊数を循環させているのだ。後者は佐伯図書館の負担が大きいため、中学校長利用者カードでの上限冊数が増えることが望ましい。

我が校の図書費・消耗品費は決して潤沢ではない。閉架書庫のない本校では、廃棄基準を満たす多くの経年劣化した本が当たり前に蔵書として図書室に並べられている。ソフトウェアの人気本であってもブックカーはかけられず、損耗が著しい。(新着図書用のブックカーに回す消耗品費を捻出するために「図書館教育ニュース」の購入を取りやめもした。)もちろん、古びた本であれば、(特にそれが文学作品であれば)その内容の価値は変わらない。時代と共に受け継がれてきた名作たちには、知性を育み想像力を養い感性を豊かにする力がある。だが、新しい本にはそれだけで価値があるのだ。ブッ

カーのかかった綺麗な本、本屋の新刊コーナーに今まさに並んでいる本、時の流に乗った本。それらは、子供たちの目にとっても魅力的に映るだろう。現に我が校の「予約の本コーナー」は、借受本が三分の二以上を占めている。「古い、堅い、少ない」という負のイメージを持たれがちな図書室を改善していくには、既存の図書を紹介、ディスプレイの工夫等に加え、「公共図書館からの借受」という即時性・娯楽性・多様性を高めることができる方法を取り入れることも必要であり、また有効であると考ええる。

限られた収容冊数・図書費・供給ルートの中、生徒のリクエストに最大限に応えるためには、このように、公共図書館との連携が不可欠である。

●事務局から●

岡山県図書館協議会活動報告

新会員紹介 七月一日以降入会(個人会員)

- 大森有希子 (瀬戸内市立邑久小学校)
- 藤原 友里 (瀬戸内市立裳掛小学校)
- 田川沙夕里 (岡山県立高梁高等学校)
- 渡邊 さよ (倉敷芸術科学大学)
- 住吉 一允 (丸善株式会社)
- 金澤 健吾 (株式会社 吉備人出版)
- 浜本 典子 (株式会社 吉備人出版)

●事業報告●

「岡山県公共図書館の目指す方向」のポスターが完成いたしました。



平成十九年度総会での提案から始まり、企画委員会が二年間かけて、皆様の御意見やアンケートの結果等を参考にし、検討してまいりました。読書週間にあわせ県内公共施設等へ配布しました。御協力ありがとうございました。

十月七日(水) 第一回企画委員会にて、企画委員長の後任に県立図書館塚本明美氏が選出されました。

平成二十一年十一月三十日  
 〒七〇〇〇一〇八二三  
 岡山市北区丸の内二一六―三〇  
 岡山県立図書館  
 メディア・協力課 図書館協力班内  
 岡山県図書館協会  
 会長 西山 猛  
 (〇八六) 二二四―二二六九